
異世界に刺激を求める者

ゆで卵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に刺激を求める者

【Zコード】

Z5538Y

【作者名】

ゆで卵

【あらすじ】

ある世界に一人の少年がいた。その世界では少年にかなう人はいなかつた。まわりにいた人は少年のことを避けるようになつた。それは、少年の近くにいたら自分が劣つて見えてしまうと思つたらだ。そのせいで少年は自分と一緒にいることができるのは自分の才能と同等のものをもつた者じゃないと思うようになり才能を持たない人を自分と同じ人とは見なくなつた。しかし、どこかでは他人と一緒にいたい、頼りたい、自分の力を思うままぶつけたいと思っていた。そんな時、その少年の目の前に白い門が現れ、門の奥に自

分よりも強い存在、自分を楽しませてくれる存在を求め、その門をくぐつた。その先には今までとは全く異なった世界が広がっていた。そこで少年は自分より強い存在に出会い、人生を楽しむのだった。初めての作品なので文章がおかしいかもしませんがそこは大目に見てください。

プロローグ

日が暮れ始め、人々が夕食の準備のために慌てているとき、黒髪の少年が通りの端で一人たたずんでいた。その少年の目には光が宿つていないように見えた。まるで、この世界に対して、あきらめを感じているかのようだった。

「何か面白い事ないかな……」

その少年が退屈そうにうづぶやいた。

『刺激が欲しいか？？』

「…………ツ！」

突如、男の声がした。少年はあたりを見渡すが少年の周りには誰もいなかつた。

『刺激が欲しいか？？』

またしても、男の声がした。

「何なんだつ！？」

少年はもう一度当たりを見渡すがやはり誰もいなかつた。

『もう一度問う

汝、刺激を求めるか？？』

男の声がした。そして、少年は気がついた。男の声が周りからしているものではなく、頭に直接響いてる事に……。

「……刺激とはなんだ？？」

少年は、男の声に返事をしてみた。

『刺激とは刺激

人生を面白くさせるもの』

「人生を面白くさせるもの、か……」

『そうだ』

「……」

少年は目を閉じて何かを考え、そして

「俺は、今まで色々な事に挑戦してきた。空手、剣道、柔道、いろいろな事にだ。だが、どれも俺とともに戦える人間は一人もいなかつた・・・

俺を満足させる人間はいなかつた。お前の言つ刺激は俺を満足させる事が出来るのか？？」

少年は男の声に問いかけた。

『出来る』

「ならば、俺はその刺激を求める。
いや、俺は・・・

その刺激が欲しいつ……！」

少年は周りを気にせず、大声で叫んだ。

『ならば、この門をくぐるがよい

されば、汝が求めるものが得られるだろ？』

男の声がそう言つた次の瞬間、少年の前に白い門が突如出現した。
そして、少年は迷うことなくその門をくぐつた。

第1話 始まり

「暑い……」

少年の顔には大粒の汗が滝のように流れていった。何故少年がこんなにも汗をかいているかと言つと、彼が今、砂漠のど真ん中に立っているからだ。

「暑い……」

少年は自分の体を見たが、汗をふける物が無かつたので、自分の手で汗を拭つた。がそれはあまり意味のないことだった。なぜなら、拭つてもすぐに汗が溢れてしまつからだ。

「」のままでは、脱水症状で死んでしまう

少年はこれからどうするか考えているがあまり良い策は浮かばなかつた。

「異世界に送るなら、もつと良い場所に送つて欲しかつた・・・」

少年は文句を言つているがその顔には悲壮感はなかつた。むしろ、この状況を楽しんでいるかのよつに見えた。

「とりあえず、前に進むか」

少年はさう言つて北へと歩き始めた。

少年が北へと歩き始める小一時間ほど前少年の位置から北に30kmほど先にある町に沢山の人々が集まつてた。そいつらは皆、剣や槍、弓などの武器を持っていた。

「あ～つ～い～」

その集団の中にいた一人の少女がつぶやいた。

「どうしてこここんなに暑いのー」

先ほどの発言からあまり時間がたたないうちにまたしても少女がつぶやいた。

これで何回目であるつか。少なくともこれで10回以上はつぶやいていた。

周りにいる人間もさすがにこの発言にいらしてきていたので文句を言おうとその発言者の方を見て、そして、何も言わなかつた。いや、言えなかつた。なぜなら、その発言者がもの凄い美少女で見とれてしまつたからだ。美しい黒い長髪、宝石のような黒い瞳、みずみずしい白い肌、その美貌は同性でも惚れこんでしまつほど美しかつた

……

「どうやら参加者が全員、集まつた様だな。私は、この討伐隊の隊長を任せられたガルバドだ。皆、よろしく。では、これより危険度E・砂漠デカミミズの討伐に向かう。皆、われの後に続け！！」

と、が体の良い筋肉隆々の男が大きな声で言った。そして、そこに集まつた人々が、その男の後に続いた。もちろん、その中には先ほどの美少女もいた。

第2話 初めての戦闘

「生き返る——つ……」

少年は小さな池に顔をつけて、水を一気に飲み喉をうるおしていた。

「砂漠のど真ん中にオアシスがあるなんてラッキーだぜ。俺って、子供のころから運が良いと思ってたけど、ここまできると、神様に愛されてるのかもな。」

少年は町を探して北に向かっている途中で偶然オアシスを見つけたのだった。もし、見つけていなかつたら、おそらく脱水症状で死んでいただろう。

「でも、これからどうするか……

水を汲んでいこうにも、袋とか持つてねーしな。」

少年がこれからのことを考えていると、

「ゴー——ンッ——!!

地面を大きく揺らしながら大きな音が発生した。

「な、なんだっ！？」

さすがの少年もこの大きな揺れには驚きを隠せない。

ドゴー——ンッ——!!

「……………！」

またしても大きな揺れがして

「向こうかっ！！」

少年は大きな揺れの震源地と思われる場所へ走り出した。

「皆、落ち着けっ！！！協力して戦えばこんなやつ倒せる。だから逃げないで戦えっ！！！」

砂漠デカミミズ討伐隊の隊長ガルバードが大声で叫んだが混乱している仲間には届いていない。実のところ、デカミミズの討伐は成功していた。しかし、その後に突如現れたデカミミズ（体長20m）の突然変異デカミミズ亞種（体長50m）の攻撃で討伐隊は壊滅に追い込まれてしまつたのだ。

「がつかりだな～」

そうつぶやいたのは、討伐隊で唯一混乱していないあの美少女だつた。

「少しは骨のある奴がいると思つたけど……
そんな奴一人もいないじゃない。時間の無駄だつたな～」

そう言つているものの、美少女にはがつかりした様子は無かつた。
最初からそう予想していたかのようだった。

「…………んつ？？」

美少女は戦闘が行われている場所と少し離れた場所を一人の少年が走っているのを見つけた。

「み、見つけたっ！！」

少年はさつきの大きな揺れの原因を見つけ、手に力を込めた。

「この世界にはあんな生き物がいるのかよっ！！」

少年の顔には喜びで満ちていた。まるで、新しいおもちゃを見つけたかのような満面の笑みだった。

「あの生き物と俺、どっちが強いか確かめてやるぜっ！」

そう少年は叫び、戦闘が行われている場所に全力で走った。

少年が走っているのを戦闘の外側で見ていた美少女はその少年の走る速さに驚いていた。

それも当然だ。なぜなら、少年は人間とは思えないほどの速さで走っていたのだから。

「ハツ！！」

少年は右手をひき、そして『デカミニミズ』亞種の顔面に拳を打ち出した。

次の瞬間、『デカミニミズ』亞種の巨体が空中に浮き、そして後方に5回転したのだった。

「 ッ！－！」

そこにいた討伐隊の面々その光景を見て驚きを隠せないようだつた。もちろん、あの美少女も驚きに口を閉じる事が出来ていなかつた。しかし、すぐに口を閉じ美少女は少年の動きを見逃さないようじっと少年を見つめた。

当の本人はそんな事に気づかず、彼が殴り飛ばした『デカミニミズ』亞種の方を見て言った。

「最高…………

最高だよつ……』の世界には俺が殴つても壊れない存在いるなんて、最高だーっ！！

殴られた『デカミニミズ』亞種は自分にダメージを食らわせた存在にいらだち、その怒りにまかせて少年へ突進した。もし、『デカミニミズ』亞種に知能があればこんな愚かな事はしなかつただろうに・・・

『デカミニミズ』亞種は朦々と砂煙を上げながら全力で突進しその進路にいた人間を『』みのように踏みつぶしていった。それを見るだけで、

その突進にもの凄い力が加わっていることが分かる。しかし、少年はそれを見てもまったく避けようとはしない。怯えて避けようにも動けないのか、それともこの程度の突進は避ける必要もないのか。少年の場合は後者だった。

「その程度で全力か？？
遅いな…………」

少年はそう言いながら右手を前に突き出した。
そして、少年はその右手でデカミニズ亞種の突進を受け止めた。
その顔には苦痛という表情はなく、そこにあるのは巨体を受け止めることができた喜びだった。

「じつや、ここの世界では俺の力が格段に引き上がらている様だ
な。」

少年はそう言いながら、敵を掴んでいる右手に力をいれて敵を真上に思いつきり投げ飛ばした。それと同時に彼の足にも力を入れて、敵の真上まで飛び、片足を頭上まで上げそして、敵の脳天に打ち下ろした。

ドゴーンッ！！！

大きなクレーターを作り、デカミニズ亞種は地面に突き刺さった

そして、少年は地面に着地し、デカミニズ亞種の近くまで歩き、デカミニズ亞種の絶命を確認した。

第3話 出会い

「フフッ」

少年は笑っていた。それは、自分よりも何10倍もの体をもつ生き物と、命の取り合いをしたからだ。

少年は命の取り合いですることがとても楽しい事だと思った。

じゅりっ

砂の上を歩く音がした。

「あんた強いんだね」

あの美少女が少年に話しかけた。

「ん？？」

少年は生き物を殺して、悦に浸っていたがその呼びかけで、自分の目の前に人がいることに気がついた。

「……おまえ誰だ」

少年は興味無さそうに言葉を紡いだ。

「私はフィオ・プリンシア
フィオと呼んで」

美少女は少年とは反対に笑顔で言った。

「……神武佑一

やはり少年はめんどくさいと言つた。

「ジンム・コーラー……変わつた名前ね

それで、单刀直入に言つけど私とパーティ組まない？？

「……何のパーティだ」

コーラーは少し首を傾けて問い合わせ返した。

「パーティといつたらギルドの
パーティでしょっ」

フィオの返答に対してもやコーラーは首をかしげた。そして、
フィオに自分の置かれた状況を話すか考え、

「……俺はこの国に来たばかりでこの国についてよく知らないん
だ」

コーラーは異世界から来た事は隠すこととした。

「だから、この国について色々教えて欲しいんだけどギルドとか
パーティとか……」

コーラーはフィオから情報を手に入れることにした。

「わかつたわ。この国について教えてあげる。そのかわりこれを
聞いたら、私とパーティ組むと約束してね。じゃないと教えてあげ
ない」

ユーリチは少し考え

「わかった。」

ピカツ！

「んつ！？」

ユーリチはフィオのポケットが一瞬光ったように見えたが気のせいだと解釈した。

「うん、なら説明するね」

そう言つたフィオの口元が笑つっていた事にユーリチは気づかなかつた。

「まず、ギルドについて説明するね。ギルドとは、魔物討伐や採集、人探しなどの依頼を取り扱っている組織で、その依頼を解決するのが私のような冒険者。冒険者の中には一人で依頼をこなす人もいるけど、ほとんどがパーティを組んで複数人で依頼をこなすのが普通かな。あと、冒険者にはランク（G , F , E , D , C , B , A , S , S S）が存在してそのランクがその人の社会への貢献度、強さを表しているんだ。

次に、この国について説明するね。この国はローリエ王国といつて周りをたくさんの国に囲まれているんだ。そのせいで、他国からの侵略の危険が高いけど、そのかわりに他国からの技術者の亡命が多いんだ。それは、この国が資源に富んでいるからね。そのおかげでこの国は技術水準が高くてね、侵略の脅威から国を守る事が出来ているんだ。」

「……なるほど

ありがとう、フィオ。よくわかつたよ。」

コーラルは説明を聞いてフィオに感謝の言葉を言った。
(本当に感謝しているかはわからないが……)

「どういたしまして。コーラルわかつてゐるよね??

フィオは笑顔で言つた。

「約束だからな…」

「コーラルはやはつめんじくさげに言つた。

「よかつた~」

フィオは笑顔で飛び跳ね、いぢわるな笑顔を浮かべながら

「この魔法具使う」とにならなくて。「

とポケットから鎖のようなものを出しながら言つた。

「魔法、具?？」

コーラルは聞きなれぬ単語が出てフィオに問い合わせた。さつきまでの態度とは一変して、その言葉には感情がこもっているように聞こえた。

「もしかして魔法具についても説明した方がいい??

「出来れば魔法についても教えて欲しい」

コーラーは魔法具といつ単語から魔法がこの世界に存在すると考え魔法について聞くことにした。

「魔法とは　　自らの力で自然の力や世の理を変える力の事。魔法は、自らが持つ個体魔力または大気に含まれる天然魔力を使って魔法陣を描くことで使う事が出来る。他にもいくつか発動の仕方はあるけど

今回はとばすね。

次に、魔法具とは　　あらかじめ道具に魔法陣を刻み込んでおき、魔力を加えるだけで簡単に発動できるようにしたものだよ。」

コーラーはその説明を真剣に聞き、先ほどの光が魔力であつたと推測した。

「なるほど。じゃあ、その魔法具にはどんな効果があつたんだ？」

「んう。これは、約束の鎖と言う魔法具で約束という意味があるんだ。で、約束を違えたものには、それ相応の報いを与えるという効果があるんだ。」

フィオは笑いながら言つた。

「報い、ね……」

「そんなことより、はやく近くの町に行かない？？
こんな暑いといつに長居したくないし～」

フィオはそう言つて

「飛翔の風」
デア・フルグ

ユーリチの手を掴んで飛翔魔法を発動した。
ユーリチはただただ苦笑するだけだった。

第3話 出会い（後書き）

飛翔の風
デア・フルーツ

効果：対象を風で包み込み空を縦横無尽に移動できる魔法

第4話 初めての都

フィオとユーリチは一人が出会った砂漠、バラーン砂漠の北端に位置するハナプラトラという都市にやって来ていた。

「ん~、涼し~。」

フィオは手を上に伸ばしながら言った。

「確かに、砂漠の中にある都市とは思えない涼しさだな。魔法で涼しくしているのか??」

ユーリチはあたりを見渡しながら質問した。

「魔法なんて使ってないよ。この都市の中心にオアシスがあるおかげで涼しくなってるんだよ。詳しい理由は知らないけど。」

「クールアイランドか。」

「クールアイランド?? 何それ??。」

「地下水が地表面からの蒸発、植物からの蒸散によって大気に放出されまわりの気温を下げる現象。それが、オアシス周辺では同心円状に広がり島のような形の涼しい地域が現れるから、そつ呼ばれている。」

「ユーリチって物知りねつ」

フィオは手を胸の前に手を合わせ可愛い顔をしながらユーリチにウインクをした。

「……これからどうするんだ」

ユーライチはフィオの行動には興味が無いのか無視して言った。

「むう。何か言ってくれてもいいのに。特に可愛いとか可愛いとか……」

フィオは口を膨らませながら言った。

「…………」

ユーライチはフィオをじっと見つめた。が、その目には感情がこもつていなかつた……

「そんな目で見られると辛いんだけど……

まあ、それは置いといて、ギルドに行つてユーライチの冒険者登録の手続きをしにいくよ」

「…………」

ユーライチは頷いた。

第4話 初めての都（後書き）

Bランク約束の鎖プロメス

効果：2人の間に約束事を決め、それを破った方には災いをもたらす。災いは約束事の重要度によって危険度が変化する。

第5話 ギルド

カラーンカラーン

フィオとユーライチはドアを開け、ギルドの建物に入った。中にいた冒険者と思われる人々は2人を見て、すぐに自分たちの会話に戻つた。

ユーライチたちは自分たちに向けられた視線を気にせず、受付番をしている男性に話しかけた。

「冒険者になりたいんだけど」

ユーライチがそう言つと周囲から笑い声「うらやましい」という音が聞こえた。

「あんなガキが冒険者だつてよ。笑わせるぜつ。ガキは母ちゃんの乳でも飲んで家で寝んねしつけてな。」

ハハハツ！！！

その言葉に周囲にいたやつらも笑いだした。

「何なのあいつらつ！！」

確かにユーライチは背が低いけど…

ユーライチも黙つてないで何か言こなさによつ！！」

フィオは男たちの言葉に苛立ちを隠せていなかつた。

そんなフィオとは対照的にユーライチは黙々と受付番の話を聞いていた。

「ねえつてばっ！…！」

ユーライチはフイオの言葉に面倒くさがりに返事をした。

「フイオ、人の言葉なんていちいち気にすることないぞ。
所詮は力がない奴のひがみなんだから。」

ユーライチの言葉にさすがのフイオも絶句し、さつきまで大声で笑つていた冒険者たちは怒りを隠せなかつた。

ドンッ！…！

「！」のガキ……

調子に乗つてんじゃねえつ！…！」

最初にユーライチをバカにした冒険者が近くにあつた机を叩きながら言つた。

「……」

ユーライチは冒険者の言葉を無視して受付番の方に振り返つた。

「このガキがつ！…！」

冒険者はユーライチの態度に我慢できず腕を大きく引きユーライチの顔面に拳を打ち出した。

次の瞬間、ユーライチ達の目の前から冒険者の姿が消えた

ズドンッ！…！

冒険者の体が壁に突き刺さっていた。周囲にいた冒険者たちは今何が起こったかわからず、しばらく茫然としていたが、仲間がやられた事に気づき、コーライチに襲いかかった。だが、1分も経たないうちにコーライチに襲いかかつた冒険者は気絶させられてしまった。

パンッパンッ！！

手を軽くたたき、もう自分を襲おうとする人がいないことを確認した。

「あんた強いんだね」

受付番が感心したように言った。

「ただこの人達じみたちが弱かつただけだよ。」

コーライチは興味なさげに言った。
その姿を見た受付番は苦笑した。

「で、説明はもう良いから冒険証の発行をしてくれ」「わかりました。では、この書類を記入してください。」

そう言って書類をコーライチに渡した。

「……」

コーライチはしばらく手に持った書類を見て、そしてフィオの方に振り返つて言った。

「文字が読めない……」

「…………ヘツー？」

フイオは予想外の質問に思わず変な声を出してしまった。

「い、今なんて言つた？？」

フイオは今聞いた言葉が聞き間違えかもしけないと呟き、ヨーイチに聞き返した。

「文字が読めない……」

ヨーイチの顔には少し恥ずかしさが浮かんでこるよつて見えた。

「本物に……？？」

「Jの国に来たばかりだから」

ヨーイチはうなづきながら言つた。

「もうこえはうだつたね」

フイオはヨーイチの顔を見て笑いを堪えていたようだった。

「…………」

ヨーイチはフイオの顔を睨めつけた。

「Jめんじめんじ。」

その紙貸して。」

そう言いながらフイオはユーリチから書類を受け取り

「私が代筆してもいい??」

と受付番に聞いた。

「かまいませんよ。ただし、こちらには本人の捺印をお願いします。」

「わかった」

フイオはすらすらと書類を記入して

「ユーリチ。ここに捺印して」

ユーリチはうなずきながら、朱肉に親指をつけて、書類に判を押した。

「ジンム・ユーリチ様でよろしいですか?」

「ああ」

「確認いたしました。では、こちらが冒険証になります。依頼を受けるときは、この冒険証が必要になりますので必ずお持ちください。失くした場合は、再発行に銀貨10枚必要となりますのでご注意を。」

「わかった」

こうして、ユーリチは冒険者になった。

第6話 武器屋

「依頼を受けなくてよかつたの」

フィオは歩きながら尋ねた。

「やつぱり、依頼を受ける前に武器を買ひたいからな」

フィオはてっきりコーライチが素手で戦うものだと思っていたのに発言に少し驚いた。そうすると、ある疑問がフィオの頭に浮かんだので、それをコーライチにぶつかることにした。

「コーライチってどんな武器使うの？」

「やつぱり剣かな。生き物を切り殺してみたいし。」

コーライチは少し微笑みながら答えた。

フィオは少し顔を引きつらせたが、コーライチはそんなことは気にせず

「武器屋つらじにいるの?...」

と尋ねた。

「向ひの町にあつたと想ひたが……」

「じゃあ、はやく行こうぜや」

やつぱりコーライチはフィオの手を掴んで、武器屋へと走り出しだ。

「う～む。どれにするか。」

「悩んでるんだつたら、軽く振つてみたら。それで、しつくりきたものを買えばいいんじやない。

良いでしょ。店長さん。」

「ああ、いいとも。ただし、周囲には氣をつけてくれよ。」「だつてさ」

コーリチはその言葉を聞くと手に持つてていた剣を試しに振つてみた。

剣のスピードはもの凄く速かつた。フィオでさえ、コーリチの太刀筋がかるうじて見えているだけで、周囲にいる人にはまったく見えていなかつた。

「うん。これはいい。おっちゃんこれくれ。」

コーリチはあんなに速く剣を振り回していたのにまつたく息を切らしていなかつた。本当に剣を振つていたのか疑問を覚えてしまいそうだつた。

「え、ああ金貨3枚でいいやれこまか」

「だつてもフィオ」

「へつ！？」

「俺お金持つてないし」

フィオは呆れて口を開じるのを忘れてしまった。

「お、お金持つてないつて、それでよく剣を買おうといつ氣になつたね……」

そう言いながらもフィオは剣の代金を払っていた。
(まあ、どうせコーライチが依頼をこなせばたくさんお金も入って
くれると思うし。これは投資金って事で)

ついで、コーライチ達は武器を買つて店を後にした。

第7話 宿屋

武器屋を出た2人は宿屋を探して歩いていた。

「どうしてどいつもぱいなのよつーー！」

フイオはいらだちを隠せていないようだった。それも当然だった。2人は武器屋を出てから宿屋を10軒以上回ったのだがどこもいつぱいで泊まる事が出来なかつたからだ。

「俺は野宿でも良いぞ。」

そう言つたユーリチはどこか楽しそうだつた。

（命の危険のある世界で野宿つておもしろやうだな……）

ユーリチはのんきに考えていたが、フイオはそつではないようだつた。

「私は絶対に嫌よつ。

お昼に砂漠に行つたせいで汗をもの凄くかいたし、砂が体にくつついて

もの凄く気持ち悪いつーー！

こんな状態で寝たくない。てか、お風呂入りたいーーー！」

フイオは周りの田を気にせず大声で叫んだ。

「だが、宿屋が見つからないんだからしじょうがないだろ。」

ユーリイチは周りの田舎にせずそつ答えた。

「……んつ……？」

ユーリイチは通りの端にあるものを見つけた。

「どうしたの……？」

フィオはユーリイチを睨みつけながら言った。

「これ……

宿屋の……看板？？……じゃないのか？」

ユーリイチはそれを自信なさげに指して言った。ユーリイチが戸惑うのも当然だ。なぜなら、その看板の文字がかくれていてよく読めないのだ。さらに、その看板がかかっている建物はもの凄く古く、地震が起これば真っ先に崩れそうちつたのだから。

「とにかく入ろうか。」

ユーリイチはフィオの手を掴んでその建物の中に入った。

「すいません。誰かいますか。」

「はい。」

ユーリイチが尋ねると奥の部屋から女性が出てきた。

「どうなたですか？？」

「僕達は旅人で宿屋を探していたのですが、ここにある宿屋がいっぱいです方に暮れていったら、偶然外の看板を見たんですが……ここは宿屋であつてますか？？」

ゴーリチがそう尋ねると女性の顔がみるみるうちに笑顔へと変わり

「はい、そうですつ……！」

と手を胸の前に合わせて喜んだ。

「お風呂」

その場にそぐわない言葉が紡がれ、2人は言葉を発した人物の方を見た。

「お風呂はあるの？」

その言葉を発したフイオは女性の方を睨みつけながら言った。

「は、はい。あります。」

睨みつけた女性は背筋をピンと伸ばして返事をした。

「…………」

フイオはじつと睨みつけた。

「お、お風呂はその通路の先にあります……」

女性の言葉を最後まで聞かずお風呂へとダッシュした。

「 「…………」 」

2人はフィオの姿を見つめ、固まっていた。

「夕飯はどうするんだい？」

フィオが入った通路とは逆側の通路から男が突然現れてユーリチに尋ねた。

「えつ……

ああ、ここで食べれるな食べたいんだが。」

「わかった。」

返事を聞いた男性はそのまま奥に戻った。

「誰……」

「驚かせてすいません。私のお父さんです。」

ユーリチがボソッと言つた言葉に女性は律義に答えた。

「 「…………」 」

ユーリチは元々自ら話題を提供する性格ではないし、女性もフィオとは違つて人と話すのが得意そうではなかつた。そんな2人の間に会話が生まれるはずもなく無言の状態がしばらく続き

「部屋に案内しますね。」

と女性はコーライチを部屋まで案内した。

「「こちらが部屋になります。」

「おお、きれいだ……」

コーライチは部屋の中を見て言った。ちりが落ちていなくて、壁にも染みとった類がなく、建物の外装とは正反対だった。

「「この部屋はあんたが掃除していたのか？？」

「はい。」

女性は自信満々に言った。どうやら、女性は掃除にはある種の自信があるようだった。

コーライチはその様子を見て感心したようだった。

「あんた、名前は？？」

「へつ……

あつ！アレシアです。」

「アレシア、アレシア……」

コーライチは口の中でアレシアの名前を繰り返した。

「アレシア。部屋まで案内してくれてありがとう。」

コーライチは微笑を浮かべながら言った。

「はい、はい。どうぞいらっしゃってください。」

アレシアは頬を赤く染めながら部屋を出て行った。

「ふう。」

ユーリイチは傍にあつたベッドに腰掛けた。

「さすがに疲れたなあ。
俺も風呂に入るか。」

ユーリイチは風呂場に向かつた。

ユーリイチはフイオよりも遅くお風呂に入つたにもかかわらずフイオより先にお風呂を後にした。

(フイオはまだ入つているのか)

ユーリイチはフイオが出てくるまで剣の手入れをするとした。
しばらくするとフイオが出てきて、

「へへ。ユーリイチって剣の手入れ出来るんだ。」

フイオはユーリイチの後ろからユーリイチの肩にあいをのせながら言った。

「ああ。」

ユーリイチはそれが当然だといつ態度をしていた。

「ンシ ヌンシ

ドアをたたく音がした。

「は～い。」

フィオは返事をしながらドアを開けた。
そこには、アレシアが立っていた。

「お食事の用意が出来たので呼びに来ました。
「わかった。案内してくれ、アレシア。」

ユーリチがそう言つとアレシアは頬を赤く染めて2人の前を歩き
だした。

「ユーリチ。アレシアって？？」

「彼女の名前だ。」

ユーリチがそう言つとフィオは有り得ないものを見たという顔を
した。

「どうしたんだ？」

さすがのユーリチもフィオの態度に不快なものを感じていた。

「いや。ユーリチが人の名前を覚えるのが意外で。」

フィオは苦笑しながら言った。

「そりか？」

「うん。昼の出来事を見た後だとね……
弱い人間には興味が無いのかと思つてた。」

フィオは自分が思つていた事を正直に言つた。

「フィオ。おまえは馬鹿か。

彼女は冒険者じゃないんだぞ……」

ユーリチは憐みの目でフィオを見つめた。

「そ、そうね……」

ユーリチにそんな事を言われてフィオは軽いショックを受けていた。だが、そのショックも次にユーリチが言つた言葉でビンに飛んでしまつた。

「それに彼女は素晴らしい才能を持っている。」

「才能??」

「ああ。フィオはこの宿屋の事をどう考えた?」

ユーリチはフィオをじっと見つめて言つた。

「え~と……

建物の外装ひどいものだつたけど、中はもの凄く綺麗だつた。風呂場もカビなんてなくて部屋もベットや椅子とかはどこにでもあるようなものだつたのに、どつかの高級宿屋みたいな感じだつた。」

「そうだな。俺もそう思つた。

彼女は掃除の才能や物をそれが本来持つている以上の魅力を引き立てる才能を持っている。これは素晴らしいことだ。」

ユーリチは頷きながら言った。彼女に感心しているようだつた。

「だから、彼女には名前を覚えてもらえる資格がある。」

フィオはユーリチの言葉に啞然した。

「し、資格?..」

「ああ。」

ユーリチはそれが当然だといつ態度を示すためにはつきりと頷いた。

「つまり、才能が無い人の名前は覚えるつもりがないと?..」

「何を当然なことを聞くんだ。フィオ。」

(ユーリチの性格ってやっぱり最悪だ.....)

「ひして、ユーリチはこの世界に来て初めての夜を過ごしたのだつた。

第8話 朝の光景

「ここは宿屋の朝食美味しかったね。」

フィオは満足そうに言った。コーライチ達は今、部屋で朝食後の休息をとっていた。コーライチははやくギルドに行こうとしたのだが、フィオが休憩したからがいいと黙々とこねたのでコーライチは渋々フィオと一緒に休息していた。

「確かに美味しかった。しかし、アレシアに料理の才能があったなんて驚きだ。」

コーライチの彼女に対する評価が上がったのが見てとれる。

「でも、あんなに凄い能力があるのに、どうして、ここはこんなに空いてるのかな。もっと、繁盛していくても良いと思つの?」……

フィオは素朴な疑問を持った。

「やつぱり、建物の外装が原因だな。」

「外装??」

「忘れたのか。あんなにひどかったのに。」

フィオはしづらげ頭を抱えて考えたが

「ここに来た時はお風呂の事で頭がいっぱいだったんだよ。」

フィオはそう言い繕つた。

「これは……ひどいね。」

2人は外に出て建物の外装を見て言った。

「魔法でどうにかできないのか?」

「まあ、出来ない事は無いけど」

2人が外で会話していると

「ゴーリチさん達はどうかおでかけするのですか??」

と、アレシアがドアを開けて尋ねた。

「今日はギルドに行つて依頼を受けるつもりだよ。」

「ギルドって……

お2人は冒険者さんだったんですねー?」

「そうだよ~。」

アレシアはフィオの言葉に驚いた。

「驚きました。お2人の雰囲気がどこか凄い感じがしていたのですが、それはお2人が冒険者だったからなんですね。」

アレシアはそう勝手に解釈した。

「では、お昼食はいらないのですね?」

「ああ、今日は外で食べるつもりだ。」

コーラーイチが心の声をアレシアは頬を赤く染めた。

（むむむ。もしかして、アレシアってコーラーイチに脈ありッ！？つて、何を焦つてゐる私は。そもそもわたしには関係の無いことじやない）

「どうした、フィオ？変だね。」

「く、く、変じゃないぞ。」

フィオは焦りながら返事をしたが、コーラーイチは氣にも留めず

「じゃあ、アレシア。俺たちはもう行くから。夕飯は宿で食べるからな。」

「はい、わかりました。いつでもお出で下さいませ。」

アレシアの頬は赤く染まっていた。

（落ち着け。落ち着くのよ私。）

フィオはまだもんもんしていた。

（そいいえば、アレシアに外装の事言ひの忘れてたな。まあ、宿に戻つたら言えば良いか。それにしても、さつきのフィオはちょっと変わったな、どうしたのか？？まあ、深く考えてもしょづがないか。）

コーラーイチはギルドに向かう途中、こんな事を考えていた。

第9話 砂漠の王（前書き）

「では、異世界に刺激を求める者の世界での通貨事情について書かせていただきます。

「銅貨…日本円で四つ一円
銀貨…日本円で四つ一〇〇円
金貨…日本円で四つ一〇〇〇〇円」

第9話 砂漠の王

「ユーリチとフィオは砂漠を歩いていた。

「それにしても、本当に暑いわね。」

フィオは額の汗を拭いながら言った。

「それにしても、ユーリチ。なんで、あんたは汗を全くかいてないの？」

フィオはユーリチを見て不思議に思った。当然だ。ユーリチは汗を全くかいておらず涼しげな顔をしているからだ。

「体がこの暑さに慣れたからな。」

「慣れたからって……」

（ユーリチって普通の人間と違うと思ってたけど本当に人間なのかな？）

フィオがそんな事を考えていると

「キヤツー！」

フィオは突然ユーリチに蹴飛ばされ地面へと倒れ込んだ。

「何するのよつー！」

フィオがそう怒鳴った次の瞬間、フィオがいた場所に砂が凄い勢

いで飛んできた。もし当たつていたら体が真つ一いつになつていたかもしれない。

「なつー!?」

フィオは驚きを隠せなかつた。

「どうやら、獲物が現れたらしい。」

ユーリチは笑みを浮かべながら言つた。

時間は少し遡る

カラーンカラーン

ユーリチ達がギルドの建物に入ると、中にいた冒険者たちが2人を見たがすぐに目を背けた。冒険者たちの顔には恐怖の色があつた。先日の出来事を思い出したらしい。

そんなことは気にせずユーリチは受付番のところに行つた。受付番は昨日の男とは違つよつだつた。

「依頼を受けたいのだが何がある?」

ユーリチが尋ねると受付番は、今このギルドにどんな依頼がある

かをヨーヨーチ達に述べた。

「なるほど……

じゃあ、これをやるとしよう。」

と、ヨーヨーチが決めた依頼は

「危険度D + 砂漠^{イクトウス}の魚の討伐」

- 内容 -

最近、砂漠の中を縦横無人にかけているモンスターがいる。そのモンスターは砂漠の中をまるで水の中を泳ぐかのように移動していく、砂漠を横断しようとする商人たちを襲っている。そのせいで、商人たちが怯えて砂漠を横断しなくなつた。このままでは、砂漠の中に位置する町で食糧や水などが不足して非常にまずい状況に陥つてしまふかもしれない。そうなる前に、このモンスターを退治してくれ。モンスターの特徴は背びれが赤いということだ。

- 報酬 -

金貨20枚と魔法具^{クストス}理の番人

- 依頼主 -

商人連盟ブンデス

「そ、それをうけるのですか？」

受付番は驚いていた。当然だ。ヨーイチはGランクの冒険者、なのに、D+ランクの依頼を受けると言ったのだから。もし、彼が昨日の出来事をその目で見ていたら驚かなかつただろう。

「悪いか。」

「い、いえつ。そんなことは……」

ヨーイチ様の砂漠イカドウスの魚の討伐依頼の受領を確認しました。」

それを聞いたヨーイチは振り返つて

「フィオ行くぞ。」

歩きだした。

（危険度D+の依頼の報酬に魔法具もつけるなんて……何からがあるかもしれない。気をつけなくちゃ。）

そして、フィオはヨーイチの後を追つた。

受付番は笑みを浮かべていた。

「砂漠の中のように移動するつてのは本当だつたみたいだな。」

」

「ゴーイチは嬉しそうに言つたが、フィオの顔は優れていなかつた。

「どうかしたのか？」

「やつぱり、何か変……」

フィオは砂漠の中を泳いでいるモンスターをじっと見ていた。

「何がおかしいんだ？」

「ゴーイチがそう尋ねると

「砂漠の魚は体長30cmの生き物で砂の中に体を隠しながら移動する。それは、皮膚が紫外線に弱いからなの。なのにあの砂漠の魚は体の一部を出しながら泳いでる……」

とフィオは答えた。

「本当に砂漠の魚なのかな……」

「だが、依頼書に書かれていた外見と一致してゐるぞ。まあ、俺は、剣でモンスターを切れるなら文句ない。」

ユーリチはそう言いながら剣を抜いて構えた。

「行くぜっ！！」

ユーリチは全速力で砂漠の魚走つて行き、

「白虎地裂撃つ！！」

ユーリチは腕に力を込めて剣先を地面をたたきつけた。数瞬後、すさまじい衝撃波が発生し、砂漠の魚に襲いかかつた。

「ガアアア――――――！」

衝撃波が砂漠の魚に直撃し、砂煙が砂漠の魚の姿を隠した。

ヒュウウウ――

砂漠に風が吹き、砂煙を払い砂漠の魚の姿を露わにした。多少の切り傷があるが重傷を負った様子はない。

「うそでしょ。あれは砂漠の魚なんかじゃないっ――

あ、あれは……
砂漠の王よつ――！」

フィオはモンスターを見て言った。

「砂漠の王？？」
「バレーナ・レアーレ

「ええ。砂漠の王……
バレーナ・レアーレ

砂漠に生息するモンスターの中でも上位に位置する奴よ。」

フィオの顔には余裕が消えていた。

「『JのJ』の強さなんだ。」

「危険度B・よ。」

それを聞いたコーライチは笑みを浮かべた。

「？？？」

フィオはそれを見て眉をひそめた。

「どうして笑ってるの？？」

「だつて、楽しいだろ。こんな依頼余裕だと思つて来てみたらこんなトラブルが起こつたんだから。」

(やう言えばコーライチはいつこう奴だつけ)

フィオは苦笑しながら思つた。

「で、どうする？

今ならまだ逃げられるけど。」

(Jのこと聞くまでもないか)

「まさか……

戦うに決まつてるだろつ！！！

フィオはおれの援護を頼むぜつ

コーライチは手に力を入れて砂漠の王バレーナ・レーに立ち向かつた。

「ふふつ。

私もここいらでユーリチに見せますか。私の実力を。」

そう言つたフィオの手には木の杖があつた。

「うおおおお———」

ユーリチは砂漠の王バレーナ・レアーレの背中に剣を振りおろした。

「ガアアアア———」

砂漠の王バレーナ・レアーレは咆哮をあげながら尾を使ってユーリチを打ち払つた。

ブンッ！——！

「クッ！——！」

ドンッ！——！ ザアアアア———

ユーリチは咄嗟に剣で攻撃を使つてダメージを受け流したが、剣先はボロボロになつてしまつた。

「これじゃ、もう切れねえな。」

ユーリチは剣を捨て、構えた。素手で戦うつもりのようだ。

「んつ？？」

ユーリチは敵の方を見るとそこにはさつきまでいたはずの砂漠のバレーナ・レアーレ

王がいなかつた。

「だるい」

ヨーイチはあたりを見渡したがどこにもいなかつた。

(まさか、地面の中か?)

「ユーリチ。上よつ！！」

フィオが空を指しながら、大声で言った。

「何つ！！！！！」

ユーリチは空を見て驚愕した。砂漠の王が空を飛んでいたのだ。
いや、実際には飛んでいなかつた。あまりにも、高いところまで飛び跳ねていたので飛んでいるように見えたのだ。

砂漠の王は咆哮をあげながらコーラーの所に落下した。

「那、那樣不行」

さすがのコーエイチも焦り避けようとするが、

「ガウ」

王の奴隸がコーラスの足に噛みついた。

「クツ！」

「」の一瞬の遅れが命取りになつた。

（避けきれない……）

「」
ユーリイチは両手を空にかかげた。砂漠の王を受け止めることにした。
ユーリイチは茫然と見ていた。

（面白い……）

「ガアアアアア――――

「ウオオオオ――――

一人と一匹は雄たけびをあげて向かい合つた。

「空への道筋」
ウインドシア

その瞬間強い風が発生し、砂漠の王を受け止めた。その光景をユーリイチは茫然と見ていた。

「どう、ユーリイチ。私も結構やるでしょ。」

その風を発生させた本人が笑いながら言った。

「フィオ……

スゲエー。魔法つてこんなこともできるのか。」

ユーリチの目はしっかりとフィオを捉えていた。ユーリチがフィオの事をしつかりと見るのは初めての事かもしない。才能のある人間にしか興味を持てないユーリチはフィオがそれなりの才能を持つている事はわかつていたが、その才能をじかに見た事が無かつたので、そこまで興味を持つ事が出来ていなかつたのだ。

(やつと、ユーリチが私を見てくれた。)

その事はフィオも気づいていたので喜びを隠せなかつた。

(せつかくだし。もっと頑張るか)

フィオが杖を上にかかげると砂漠の王も空高く飛んでいき、フィオが魔法を解くと砂漠の王が落下した。

「くらえつ！…」
「精霊の暴風」

ヒュンッ！…ヒュヒュヒュンッ！…

砂漠の王の落下先にかまいたちが発生し砂漠の王を切り裂いた。

「ギガアアアアアア…」

砂漠の王は体を細切れにされ、苦痛の声をあげてた。だが、それもすぐに止んだ。砂漠の王が頭と赤い背びれを残して絶命したのだ。砂漠の王の血が砂漠を赤く染めあげた。

第9話 砂漠の王（後書き）

空への道筋 ワインデシア

効果：強力な上昇気流を発生させる魔法。この上昇気流に巻き込まれれば大抵の生き物は風に耐えられず絶命する。

精霊の暴風 マエストラーレ

効果：強力な暴風を発生させその内部からかまいたちを放つ魔法。かまいたちを放てば放つほど暴風の規模は小さくなる。

第10話 襲撃者

「^{パレーナ・レー} フィオは砂漠の王の頭部と背びれを袋に詰めていた。これは、依頼をこなしたという証拠を示すためである。

「驚いたな。おまえがあんなに強いなんて。」

^{パレーナ・レー} 砂漠の王の血がかかり、服が赤色に染まっていたコーライチがフィオに話しかけた。

「ありがと。」

フィオの顔が少し赤くなつた。

「今度手合わせしないか。」

「いやよ、コーライチみたいな化け物戦うなんて、命がいくつあっても足りないもの。」

「残念だ……」

コーライチの顔が一瞬、がつかりしたように見えたが、すぐに真剣な顔になつた。

「どうしたの？」

その表情を見て、フィオは今行つてゐる作業を中断してコーライチと向かい合つた。

「やつときは助けてくれてありがとうな……」

恥ずかしいのかコーライチはそっぽを向いてしまった。

「えつー?」

あ、ああ。そんな、仲間なんだから当然の事をしたまでよ。」

お礼を言われて恥ずかしいのか、フィオは中断していた作業を開した。

二人の間に何とも言えない空気が流れ、フィオはその空気に耐え切れず

「それにしても、あのギルド私たちをほめるなんて許せない。」

その空気を払しょくするためにフィオはは思っていた事を言った。

「ギルドの受付番、」の事を知つてたに決まってる。」

「どうして、やつ思つんだ?」

「えーと……

あれよ、コーライチが昨日倒したやつらと手を組んで仕返しをしようと考えていたのよ。うん、そうに決まってる。」

フィオは首を縦に振つてウンウンと頷いた。

「それは違うと思つたわ。」「

すぐに、コーライチは否定した。

「じー、じうして…?」

「仕組んだにしては行動がはやすぎる。あんな奴らが一日で出来るはずがない。もつと昔から仕組まれていたと思つんだが……」

とにかく都に戻る。」

「そうね。」

2人はとにかく都に戻る事にした。

カラカラーン

「なつー?」

受付番はドアの先にいる人物を見て驚愕した。

「そんなに驚いてどうしたの??」

フィオは受付番を見ながら言った。その顔には、笑みが浮かんで
いるが目が笑っていない。

「い、いや、何でもない……

そんなことより、どうしてここにいるんだい???」

受付番の顔は引きつっていた。

「もちろん、依頼をこなしてきたのよ。」

そう言って、袋の中から赤い背びれと顔をとりだして受付番に見

せつけた。

「なつ……」

「どうしたの？？」

「い、いえ……」

確認させていただきますね。」「

受付番はやう言つてフィオから顔を受け取つじつと見て

「本物のようですね……」

顔を青くしていた。

「では、報酬として金貨20枚、魔法真理の番人クストースを受け取りください。」

受付番から報酬を受けとったフィオは受付番に何か言おうとしたが、後ろにいたコーライチに引っ張られ何も言わずにギルドを後にした。受付番はその姿を敵を見るような眼で見つめていた。

「なにするのよつ……。」

フィオはコーライチに文句を言つた。あの場であの受付番を問い合わせようとしていたのに、それを邪魔されて苛立つているようだ。

「あの場で何か言つても適当な言い訳を言われてあしらわれてたよ。」

「それは、そうかもしれないけど……」

「まあ、今は適当に時間をつぶそう。相手が動くまで……」

「どうこう事??」

「……」

日が暮れ始め、人影がなくなつた頃。

「アレシアに遅くなるって言つとけばよかつたな。」

ユーリチがそう言つがフイオは返事をしなかつた。通りの端で頬を膨らませてすねていた。この時間帯になるまで2人が時間を潰している間、何度も理由を聞いてもユーリチが答えてくれなかつたらだ。

「教えてくれてもいいのに……」

その様子を見ていたユーリチは

(教えてあげればよかつたか。だが、俺が考えている事が正しいとも限らないし)

ユーリチがそう考へていると、通りに武器を持った人間が現れ、突如ユーリチ達に襲いかかつた。が、そんな攻撃ユーリチ達からすれば子供の攻撃と変わらないわけで、襲撃者は簡単に捕まつた。

「なんなのこいつ??」

「ギルドの受付番だ。」

コーラルはそう言って襲撃者が被っている仮面をとつた。その仮面の下にはコーラルが言った通りギルドの受付番の顔があった。

「う、嘘っ！！

どうしてわかったの。コーラル。

「フイオ、バレーナ・レアーレ砂漠の王の頭と背びれをこいつに渡したのはどうしてだ。」

「それは、私たちがバレーナ・レアーレ砂漠の王を倒した証拠を示すためで。」

「そうだな。だが、俺たちが受けた依頼は背びれの赤いイクトウス砂漠の魚バレーナ・レアーレであつて砂漠の王ではない。なのに、こいつは砂漠の王の顔を見て俺たちに報酬を渡した。だから、こいつには何がある思つたんだ。だが、あの場で問い合わせても意味がないと思つたからこいつが動き出すのを待つていたんだ。そうしたら、案の定襲われたってわけだ。」

「

コーラルがそう言つとフイオは納得がいったようだ。

「でも、そうだったなら教えてくれてもいいじゃない……」

「俺も半信半疑だつたからな。」

まあ、今はこいつから詳しい理由を聞こつか。」

コーラルは意地悪な笑みを浮かべて、襲撃者を見た。

「答えてくれるよな？？」

「…………ガツー！」

襲撃者が黙つたのでコーラルは腹を殴つた。

「答えてくれるよな。」

「ユーリイチの顔には感情が無かった。

「…………」

それでも襲撃者は黙つているのでユーリイチが殴ろうとするヒ

「そこまでだつ……」

ユーリイチ達の後方に人間の集団が現れた。

(二)いつの仲間!?

フィオはその集団を見てそう思つた。

「何者だ? ?」

ユーリイチが尋ねるとその集団の隊長格の人間が前に出て答えた。

「私はローリーH王国直属部隊副隊長ファルコン。」

「ちよつ、直属部隊つ! ?

どうして直属部隊がここに? ?

ファルコンの言葉を聞いたフィオは顔を青くした。

「その男を引き渡してもらおう。」

「嫌と言つたら、どうする? ?

2人の間の気温が急激に下がった感じがした。

(「いつ強いな）

ユーリチが笑みを浮かべ構えをとつた。

その姿を見たファルコンは拒絶と判断し戦闘態勢に入る。

「なつ！？」

ユーリチ、何考へてるの！？」

「別に、俺はただこいつと戦いたいだけだ。」

このままでは本当に戦闘へと発展してしまつと思ったフィオはギルドの受付番だった男の首根を掴みファルコンの方へ投げた。

「私たちは戦つつもりはないわ。ユーリチも手をひきなさい。
「なんで俺がフィオの「いいから引・き・な・さ・い」

ユーリチはフィオの剣幕に押され戦闘態勢を解いた。それを見たファルコンも戦闘態勢を解いた。

「話のわかる女性でよかつた。
「では……」

ファルコンは男を掴むと部下を連れてこの場を去つた。

その姿を見送つたフィオは力が抜けたのか、地面に座り込んだ。

「どうして邪魔したんだ、フィオ。」

「王国直属部隊に手を出したらどうなるかわかるでしょう。」

「わからん。」

「.....」

ユーリイチの言葉を聞いてフィオは口を閉じることが出来なかつた。呆れてしまつたのだ。

「手配書が国中に配られて私たち犯罪者になつてたのよつ！！」

「別にそれでも俺は気にしないけど。」

「あんたが気になくても、私が気にするの。この戦闘バカが！」

「..」

フィオはユーリイチを見てため息をついた。

「とにかく宿に帰るわよ。」

ユーリイチの腕を掴んで宿屋の方に歩いて行つた。

第11話 ほのぼの

「ふ」

ユーリチは今、宿屋の風呂場で湯につかっていた。体についた血の匂いを洗い流した。ユーリチ達は気にしていなかつたが通りを歩いている間、町人は血の匂いが凄くて不快な思いをしていたのは言うまでもない。

「それにしても、ファルコンという男もの凄く強そうだったな。いつか、手合わせしたいな。」

ユーリチは宿屋に戻る前に出会った男の事を思い出していた。

「…………出るか。」

「湯加減どうでしたか？？」

「丁度良かつたよ。」

「それは良かつたです。」

アレシアは笑みを浮かべ、奥の部屋に入った。そして、夕飯を持って戻ってきた。

「ユーリチさん。どうぞ。」

「ありがとう、アレシア。こんな遅くに悪いな。」

「いえ、お構いなく。コーラーさんのお力で、お手伝いします。」

最後の方は声が小さすぎてヨーイチの耳に届かなかつた。

「気持ちよかつた」

フィオが風呂場から出てきた。それを見たアレシアは奥の部屋に入りフィオの分の夕飯を持ってきた。

「フイオさん。どうぞ。」

「あらかど、アレシアさん、こんなに遅く」「めんね

その言葉を聞いたアレシアは笑みをほほした。

「どうしたの？？」

卷之三

「ハルセーヴ。」飯を吃べるときは静かに食べる。」

フイオは言い返そつとと思つたが、ユーリチが黙々とご飯を食べてゐるのを見て、自分がおなががすいてるのに気づき、ご飯を食べる事を優先した。

「アーティストの世界」

2人は同時に食べ終わった。

「フィオは食べるのがはやいな。」

「ヨーヨーの食べるスピードが遅いのよ。」

「…………」

2人は無言で睨みあつたが無駄な事だと悟り、アレシアにお礼を述べて部屋に戻った。

「今日は色々な事があつたね。」

「そうだな…………」

フィオ。今日の依頼で手に入れた魔法具を見せてくれないか。」

フィオは鞄の中から魔法具真理の番人クストスを取り出した。

「はい。」

ヨーヨーは無言で受け取りしばらく見て

「ただの石像のようにしか見えんな。」

悲しげな表情で言った。

「魔法が使えない人が見たらただの石像にしか見えないから違うがないよ。魔法具はそういうものだもん。」

「悔しいな。俺も魔法を使えるようにならないかな??」

「コーライチの質問に首を横に振りながら答えた。

「それは無理だと思つ。コーライチには魔法の才能ないもの。」

「斐オに断言されてショックを隠せないようだつた。コーライチはショックからしばらく立ち上がりそうにないので斐オは魔法具を調べることにした。

「やつぱり……

「この魔法具 S S ランクだ

「 S S ランク? 」

いつの間にかコーライチはショックから復活していた。

「うん。魔法具にもランク (G - F - E - D - C - B - A - S , S S) が存在するのだけど、この魔法はその中でも最も高いランクの魔法具なのよ……」

「凄いじゃん。どんな力が秘められてるんだ? 」

「鑑定士に頼まなくちゃわからないわ……

どうせコーライチは知らないから説明しとくけど鑑定士と言つのは魔法具に秘められている力を明らかにする人のことだから。

「なるほど。だったら、はやく鑑定士にみせようぜ。どんな効果があるかはやく知りたいし。」

「そうしたのは山々なんだけど……
たぶん無理だと思つわ。」

その言葉を聞いてコーライチは「なぜっ??」といつ表情を浮かべた。

「この魔法具を鑑定できるのは高位鑑定士だけ。高位鑑定士はこ

の大陸に10人いるかいないか。少なくとも私の知り合いにはないわ。」

「ヨーハチは力が抜けて床に倒れ込んだ。魔法具の効果を知ることが出来ないことがよほど堪えたらしい。

「そ、そんながっかりする事ないって……

旅を続ければもしかしたら高位鑑定士に会えるかもしれないし。

「

「そうだな……

じゃあ、明日にいきを出発しよう。」

「えつー!?」

ヨーハチの突然の言葉に驚いたがすぐに納得した。

「そうね。この町にいてもやる事はないもんね。」

「わかってるじゃんか。せっかく、刺激を求めてこの世界に来たのに退屈したら意味ないからな。

とにかく、明日に備えてもう寝よう。おやすみ、フィオ。」

「そうね、おやすみ、ヨーハチ。」

2人はすぐに夢の世界に落ちた。

第12話 旅立ち

(上が下。下が左。左が右。右が上。この白い世界には、上下左右の概念が無かつた。全てが上で、全てが下の世界。俺は、どうしてこんな世界にいるのだろう。)

『それはここが夢の世界だからだ』

男の声がした。

(どこかで聞いた事のある声だ。)

『汝

忘れたのか』

男の声が頭に直接響いた。

(そうだ、この声は俺があの世界に行くときに聞いた声だ)

『思い出したか』

男の声が今度はこの白い世界に響いた。

『汝聞くが良い

汝が手に入れた理の番人^{クストス}

それはあの世界のありようを変えてしまつほどどの力を秘めている
汝の力で理の番人^{クストス}を守るのだ』

(なんで俺がそんな事をやらなきゃいけないんだ)

『理の番人は力がありすぎ
自ら災いを呼び寄せる性質がある
理の番人を持すればたくさんの災いがふりかかるだろう』

(だつたら、なあの事、俺がやる理由なんかない)

『本当にそういうと思うのか』

(どうこうことだ)

『災いとはすなわち敵』

(……)

『理解したようだな
理の番人を持つていたら強い敵が集まつてくれる
さすれば
汝に刺激をもたらしてくれるだろう』

朝になつていた

ユーリチは周りを見渡し自分が昨日寝た場所にいた事を確認した。

(夢か……)

「コーラルは寝ていて見えた夢の事を思い出していた。夢なのに
はっきりと覚えていた。夢の内容を家と言われば一字一句間違え
ことなく話す事が出来るだらう。それほど、明確に覚えていたのだ。

「どうしたの？」

いつの間にか起きていたフィオがコーラルの顔を覗いて言った。

「別に。

それより、理の番人を貸してくれないか。」

フィオがコーラルに手渡すとコーラルは昨日買った袋の中に入れた。

「理の番人は俺が持つけどいいよな？」

「別にいいけど。突然どうして？」

「なんとなくだ。」

(夢の中の話をうのみにするつもりはないが。少しぐらい信じても……)

コーラルはこの世界に刺激を求めてきた。それが、この魔法
具を持つてはいるだけで自らやつてくるかもしれないのだ。コーラル
はその誘惑に勝てなかつた。

2人は旅立ちの準備をした後、アレシアが用意してくれた朝食を
食べた。

2人はアレシアに宿屋に泊つた料金を払つた。

「世話になつたな。」

「いえ、そんな……」

本当にもう行つてしまつのですか？？

アレシアは寂しげな表情を浮かべながら言つた。

「ああ、俺はこの世界でたくさんの刺激を見つけたいんだ。だから、ここに、ずっと滞在するわけにはいかない。」

「そ……そですか……」

アレシアはどこか悲しそうな顔をした。

「そうだ。建物の外装の事なんだけど。」

「へつ？」

「もつときれいにすれば客がもつと来ると思つぞ。フィオは魔法が使えるから簡単に直せるし、どうする？？」

「嬉しいのですが。私は、この建物が好きなので、その……」「そつか。アレシアがこれでいいのなら、いいんだけどさ。」「その、『ごめんなさい。』

「アレシアは謝んなくていひつて。

じゃあ、そろそろ行くな、アレシア。元氣でな。」

「はい。ヨーヨーさんもお気をつけ。」

アレシアの目にはかすかに涙が出ていた。

そして、2人光景を近くで見ている人がいた。

(何この状況。完全に私つて空氣じゃない。)

「フィオ、行くぞ。」

「あ、うん、今行く。」

アレシアさん、短い間だつたけどお世話になりました。また会いましょうね。」

「はい、じゅりゅう。」

2人はこうしてハナプトラを後にした。

「去りましたか。」

アレシアの後ろに突如男性が現れた。

「ええ。」

アレシアは気にすることなく返事をした。

「しかし、アインザームガイ孤独の庭が破られるとは驚きでしたね。」

「破られてない。」

「では、自ら招き入れたと?」

「それも、違う。」

「……『じつにう』とでしようか?」

男は自分がからかわれてゐるのではないかと考えるがすぐにやめた。アレシアがそんなつまらない事やるはずがないと知っていたからだ。

「私にもよくわからない。ユーライチ達が宿屋に入つて来て破られたのかと思って、急いで術式を確認したが問題なく発動していた。一様、他の人間にも試したけどおかしなところはなかつた。」

「不思議ですねー。彼らは何者なのでしょうか??.」

「さあ、少なくとも今は敵じゃない。」

そう言つたアレシアの顔は悲しそうだった。

「で、『じつにう』に来たの?」

「そうでした、忘れる所でした。幹部は全員王都に集合。これは、団長命令ですから、欠席する事は許されませんので。」

「王都……か」

「何か問題でも??.」

「いや、ない。他には」

「もうありません。」

風が吹いた。男の姿はいつの間にか消えていた。

(ユーライチさん達も王都に向かつて言つてたな)

彼女の瞳にはもう悲しみの色はなかった……

第12話 旅立ち（後書き）

孤独の庭
Aインザームカイト

効果：この魔法をかけられたものは発動者が許可したもの意外には認識されないようにする魔法。

第13話 空の要塞『パレオ・フリオ』との戦い

「ヨーヨー。本当に歩いて行くの？」

飛翔魔法を使えば王都まではひとつ飛びだよ。」

「フィオの言うとおり魔法を使えばすぐに王都につく事が出来る。では、なぜしないのか……」

それは

「せつかく、田の前に危険な場所が存在するのに、そこを避けていくなんてもつたいない。」

ヨーヨーが嫌だと言っているからだ。

「俺は絶対に歩いて行くからな。」

「む！」

わかつたわよ。歩けばいいんでしょ歩けば。」

そう言つとフィオはドシドシと音をたてながら歩いた。その直後フィオの足場が崩れ去つた。

2人は今、ハナブトラと王都の間に位置する絶望の土地キトス・インヴィクタと呼ばれている岩山にいた。キトス・インヴィクタは普通の人間が進むには過酷な場所だった。人間が歩くための足場がほとんどなく、あつたとしても乗れば壊れてしまうほど脆いのである。そして、その環境で生きる為に進化した鳥型のモンスター。この2つの要因でここは絶望の土地キトス・インヴィクタと名付けられた。

「それでも、ヨーヨーって本当に化け物ね。」

「フィオは崩れていな足場に着地した。

「そうか？」

「うん、私は魔法で体を軽量化してるから足場は簡単には壊れないけど。コーライチは魔法を使つていないので、どうして足場がこわれないの？」

「岩場に体重がかからないうようにしている。」

「…………」

フィオは呆れていた。そんなことが出来るのかと思い、コーライチなら出来そうな気がした。

「…………」

コーライチは岩壁の隙間を見た。

「どうしたの？？」

「この隙間の奥に何かいる。」

「よし。先に進もう。」

フィオが逃げようとするが、コーライチに腕を掴まれてしまった。

「フィオ。向い側に行いつ。」

コーライチはフィオ腕でを掴みながら高く飛んで岩壁に上側に着地した。その後、着地した場所が崩れ去った。

「クツ！？」

「コーラーは前へ前へ進むがすぐに岩場が崩れ去ってしまった。そして、コーラーは比較的頑丈な岩場に移動した。

「“どうせ”は他の場所と比べて頑丈なようだな。」

コーラーはフィオの腕を離した。フィオは無理やり引っ張られ少しふりついた。

「あ、危ないじゃないつ……！」

そう言いながらフィオは地面を蹴った。コーラーはすぐさまその場所から離れようとするが地面は崩れる様子はない。

「フィオの方こそ危ないぞ。足場が壊れたらどうするつもりだ。」「うう……」

「ごめん。コーラー。」

フィオは自分がした行動がどれだけ危険なことか理解したようだ。

「アーハーハ」

「…………んっ！？」

「今揺れなかつたか？」

「アーハーハ」

「あ、なんか揺れた気がする。もしかして地震ッ……？」

「こんな場所で地震が起これば2人はひとたまりない。」

“ハハハハハ

「段々、揺れが大きくなつてゐる……」

「とにかく、空中に避難しましょ。」

フィオは持つていた杖に魔力を込めて

「ディア・フルグ
飛翔の風」

風がユーリチ達を包み込んだ。

“ハハハハハハハ

「何かおかしい……」

ユーリチは空から地面を見て揺れがおかしい事に気がついた。

「何がおかしいの、ユーリチ？？」

「揺れはかなり大きかった。なのに、他の岩場がまったく崩れて
いない。」

「あつ！！」

「私たちが着地しただけで崩れるほど脆いのにこの揺れに耐えら
れるはずがない。」

その直後……

「ガオオオオオオオ——！——！——！」

ユーリチ達が足場にしていたところが突如咆哮をあげた。どうや
ら、ユーリチ達が足場にしていたのは岩場ではなくモンスターの背

中だったのだ。

「おお——」

ユーリチは嬉しそうな声をあげた。

「あれは、なんて言つモンスターだ??」

「パレオ・フリオ
空の要塞……」

危険度B - のモンスターよ

「じゃあ、砂漠の王と同じくらいの強さか。
燃えるぜ——————！」

フィオ、この魔法を解いてくれ。このままじゃ、移動できない。」

「解くつい……

戦つつもりなのっ！？

「当然。その為にここを通つたんだから。」

フィオは何か言いたげだったが言つても無駄だと思い解くことにした。直後、ユーリチの体は落下すると思われたがしなかつた。ユーリチは空中に立っていた。

「ど、どうなつてんだ！？」

ユーリチは自分が空を歩けるようになったかと思い驚いたが、フィオが魔法を発動しているのに気がつきそれは違うと理解した。

「何をしたんだ？？」

「ヴィント・ヘルシャー
風の支配者。この魔法は自由自在に風を操る事が出来るのだ。

から、足場だって作れるすぐれもの。でも、この魔法はたくさん魔

力を消費するから長い時間は持たない。せいぜい、30分が限界だから。」

フィオの顔にはうつすらと汗がにじんでいた。

「30分もあれば余裕だ。」

ユーリイチは空の要塞パレオ・フリオに素手で立ち向かった。

ユーリイチが近づくと空の要塞パレオ・フリオの体にたくさんの穴ヴァイント・シュピースが出現し風の槍ヴァイント・シュピースをユーリイチに向かって放った。

「クツ、ハツ！」

ユーリイチは体を動かして敵の攻撃を避けている。そして、避けた先に風の槍ヴァイント・シュピースが飛んできた。

「チツ！」

(これは避けきれん)

態勢が崩れていてユーリイチでも避けきれない。腕を体の前でクロスし、攻撃を受け止めようとする。

「オオオオオ——

直後、突風が吹きユーリイチの体を横にずらす。そして、その横を風の槍ヴァイント・シュピース通り過ぎた。

「フィオ。助かった。」

フィオは笑っていたが表情はつらそうだった。魔力の消費が随分激しいようだつた。

(フィオは30分と言つたがそこまでもつか……。はやめに決着をつけた方がいいな)

「とにかく、近づかない限り攻撃を当てるこどもできない。」

ユーリチは足に力を込めて空の要塞に突進した。

「ガオオオオオオオ————」

空の要塞はユーリチに向かつて風の槍を放つた。

「ハツ！」

フィオは風を操り空の要塞の風の槍を防ぐが、数が多くすぎて全てを防ぎきれなかつた。

「フツ！」

ユーリチは全体重を拳にのせて、風の槍に殴りかかつた。風の槍はユーリチの拳を受けて粉々になつた。ユーリチは自分の拳で風の槍を破壊できたことに満足したが、ユーリチの拳はズタズタになつていた。

ユーリチは自分に放たれた風の槍を拳で破壊しながら、空の要塞に近づいて行つた。そして、ユーリチに向かつてきた最後の風の槍を破壊した。そのときにはすでにユーリチの拳は痛みを感じられな

いままで傷ついていた。

タンツ

(背中に取りつけたが、匕首や刺しにこいつを倒すか……)

「危ない。コーラーイチッ！――！」

「んっ！？」「

コーラーイチに向かつて風の槍が放たれていた。コーラーイチは攻撃を空の要塞（オ・フリオ）の背中を走った。

ドンドドンドンッ――――――

風の槍（ガイント・ショブリース）が空の要塞（ガイント・ショブリース）の背中にぶつかる音がした。しかし、風の槍（ガイント・ショブリース）がぶつかった場所には傷一つなかった。

(背中は頑丈と言つことか)

「…………」

そして、背中に穴があきコーラーイチに向かつて風の槍（ガイント・ショブリース）を放つた。

コーラーイチはその光景を見ながら考えて

「やうだつ――――」

コーラーイチはある事を考えついた。

「フイオ。一瞬で良い。次のこいつの攻撃を防いでくれ。」

コーリチの言葉を聞いたフイオは額き手に力をいれた。そして空の要塞^{パレオ・フリオ}の背中に穴が出現した。それを見た、コーリチは穴に向かつて走った。そして、コーリチに向かつて風の槍^{ヴァイント・ショビース}が放たれた。それを見てもコーリチは走る速さを緩めなかつた。

「ハアアー————ツ！！」

フイオは声をあげてコーリチの目の前に自ら作り出した風による盾^{ヴァイント・ショビース}を出現させた。風の槍^{ヴァイント・ショビース}がぶつかつてもその守りに搖らぎは見えなかつた。風の槍による攻撃を完全に防いだ。

風の槍^{ヴァイント・ショビース}の攻撃が止まつた。空の要塞^{パレオ・フリオ}が背中に出現した穴が消え始めた。

「クソツ――！」

間に合え――――ツ――！」

コーリチは穴の中に頭から飛び込んだ。コーリチは穴が完全に消える直前に穴の中に入る事に成功した。

(コーリチの奴、無茶しちゃつて。じゃあ、こっちも頑張りますか)

フイオは顔を流れている汗を拭い、空の要塞^{パレオ・フリオ}がフイオの事を見たのを確認して杖に魔力を込めた。

パレオ・フリオ
空の要塞内部

「ふう~」

ユーリチは空の要塞の内部に侵入することに成功した。

「それにしても、真っ暗でよく見えん。」

ユーリチは迷路のような空の要塞の内部を進んでいた。ユーリチが内部を歩いていると突如光が差し込んできた。光はユーリチが通つてきた方角からきていた。直後、風が吹いてユーリチを空の要塞の内部深くへと運んで行つた。

パレオ・フリオ
空の要塞の外部

パレオ・フリオ
空の要塞の背中に穴が出現しフィオに向かつて風の槍を放つた。

「ハツ!!」

フィオは自分の周囲の風を操り風の槍を防いでいた。

ユーリチが空の要塞の内部に入つてからすでに10分経っていた。戦闘時間の合計はすでに25分に達していた。

(ユーリチはやく……。もう、やばいかも。)

フィオの顔にはもう余裕が無かつた。

「痛～。」

ユーリチは体をさすりながら言つた。風で運ばれた後、突如逆風が吹いてユーリチの体を壁に叩きつけたのだ。それが何度も起つたのだ。

(俺つて本当に運がいいぜ)

ユーリチは今、パレオ・フリオ空の要塞の肺の中にいた。

ドクンッ！…ドクンッ！…

肺の外から音が鳴りやむ事なくなつていた。

ドクンッ！…ドクンッ！…

ユーリチはその音が一番大きく聞こえる場所に移動した。

(ここか。ここに、奴の心臓がある。)

ユーリチは力を一瞬抜いた。心臓があると思われる場所を見、そして左腕をひき。

「ツ……！」

目が飛び出てしまつてはと思えるほど見開き。腕に持てる限り

の力を込めて拳を放つた。

空の要塞外部

すでに、フィオの魔力は尽きかけていて、飛んでいるので精いつぱいだつた。

空の要塞の背中に穴が出現した。

(私もここまでかな……)

フィオは諦めようとした時

ド――――ンッ――!

「ガアアア――――ツ――!」

空の要塞の方から大きな音が聞こえた。空の要塞を見ると体をねじっていた。体に走った強烈痛みに耐えられないようだ。

ド――――ンッ――!

「ガアアア――――ツ――!」

音が鳴る度に空の要塞が体をねじり口から大量の血をはいていた。

「そろそろ、外かな??」

フィオはユーリチの声が聞こえてたような気がした。直後、今ま

でで一番大きな音がした。そして

「ガアアアアアアアア——ツ

תְּהִלָּה

パレー・オ・フリオ
空の要塞は悲鳴をあげながら地面へと落下した。大地は空の要塞
の重さに耐えられず、崩れ去つていった。空の要塞は絶命した。
パレー・オ・フリオ

「ユーリチツ！！」

「 フイオは力を振り絞つて空の要塞に近づきユーライチを探した。」
パレオ・フリオ

「ゴーゴーイチッ！…
ゴーゴーイチ聞こえてる？！？
聞こえてるなら返事しちつ…」
「…聞こえてるよ。」

フィオの大声の呼び掛けにユーリチはだるそうに返事した。

「よかつた。コーラス、無事でよかつた……」「お互いにな……」

2人は空の要塞の背中の上で抱き合つた。 フイオは今まで色々な敵と戦つたが空の要塞のように強いモンスターと戦うのは初めてだつたのだ。 自分よりも強い敵と戦う恐怖。 コーアイチと自分が死ぬかもしれないという不安。 そんな不安を抱えて戦つていたのだ。 その不安から解放されて、涙を我慢できずにボロボロと流していた。

第13話 空の要塞『パレオ・フリオ』との戦い（後書き）

ヴァイント・ヘルシャー 風の支配者

効果：発動者の半径200mに存在する風を自由に操る事が出来、また魔力を風に込める事で風に実体を持たせる事が出来る魔法。魔力の量によつて強度が変わる。ただし、他の生き物が魔力を込めた風は操る事はできない。

第14話 復讐を誓つもの

「クソがああああ——」

男は頭を抱えながら叫んだ。よく見るとこの男はギルドの受付番をしていた男だ。

「なぜだつ。なぜだつ。なぜだつ！—

砂漠の王だけでなく空の要塞までもあんな小童たちに殺されるんだつ！—」

「そこまで怒る事でしょうか。エヴァルトさん？？」

アレシアの元に現れた男性が問いかけた。

「怒るに決まってるだろ？！—！—！」

あいつらは……。あいつらはおれの大事な大事な息子たちを殺しだんだぞつ！—

黙つてなんかいられねえ！—」

エヴァルトは怒り狂っていた。周囲にあるものを投げ、そして壊して自分の精神を保とうとしていた。

(息子ね……)

男性はエヴァルトの事を汚物のよつと見ていた。

「まあ、ほびほじにじてぐださこね。片付けるのが大変なので。」

しかし、男性の言葉はエヴァルトの耳には入っていなかった。

(そんなだから感情に任せ、自分より強い奴に襲いかかるという愚行をおかすのだ。)

「とにかく、Hヴァルトさんは計画が成功するまでここから出ないでくださいね。」

「何つ！？」

ふざけるな！..

俺は今すぐあいつらを殺しに行く。おまえの言つ事なんか聞くか！」

！」

Hヴァルトはそう言つてこの部屋を出よつとするが

「ここれは団長命令ですか？」

「……ツー！」

この言葉を聞いて足を止めた。この者たちの中では団長命令は絶対のようだ。

「……わかった。」

「それは良かつた。では、私はこれで。」

そう言つて男性は忽然と姿を消した。扉を使った形跡はなかつた。

「うがあああ――――――」

エヴァルトは大粒の涙を流していた。それほど、砂漠の王と空の要塞に対する愛は大きかったのだ。

・フレオ
・フレーナ・レアーレ
・パレー・オ

「絶対に殺してやる……」

エヴァルトはユーライチ達への復讐を心に決めた。

第15話 王都での戦い その1

パレー・オ・フリオ
空の要塞を倒したユーライチ達は今、绝望の土地を抜けてから少し進んだ町に滞在している。

「ああ～～。どうして、あんな恥ずかしい事をしちゃったの……。」

フィオはユーライチの前で泣いてしまった事を思い出して頭を抱えていた。ここ最近こんな調子だった。

さらに、ユーライチの前に出るとあの時の事を思い出してまたも顔を見れずにいた。対するユーライチは

（なんで、俺はフィオに助けを求めてんだ！？ 強い奴と戦いたいと言つときながら、他人に助けを求めるなんて情けない……。今度は絶対そんなことしないっ！）

と考えていた。

それから、2日間この町で休息をとり、2人はこの町を後にした。

「フィオ、ここ最近おかしいぞ。」

「そ、そうかな……」

ユーライチ達は王都の入口に続く一本道を歩いていた。

「ああ、おかしい。今までには田を見て話してたけど、最近は田を合
わせてない。むしろ、故意にそらされてる気がする。」

「コーリチがそう言いながらフイオの顔を覗くと、フイオは顔を赤
くしてそっぽを向いた。

「ほら、そらした。」

「そ、そんな事ないわよ。」

若干フイオの声が上ずつっていた。動搖しているのが見え見えだっ
た。

ガサツ

「 ッ！？」

茂みが揺れたと思つたら、黒服の男がコーリチに向かつて剣を振
りおろした。コーリチはその攻撃をギリギリのところでかわし、襲
撃者の武器を持つている手を思いつきりたきつけた。その衝撃で
襲撃者は剣を落としが、襲撃者は剣を拾わず森の中に逃げ込み、す
ぐにその姿が見えなくなつた。コーリチなら追えば捕まえることは
出来たのだがしなかつた。コーリチはそれが無意味な事だと知つて
いたからだ。

「またか。これで何度目だ。」

「たしか、今回で10回目だと思つよ。」

フイオ達が黒服の男に初めて襲撃されたのは絶望の土地を抜けた
後に滞在した町を出発してから、ほんの2時間程度経つた後だつた。
このときは、コーリチは襲撃者に襲われたことに興奮して思わず半
キース・インヴィクタ

殺しにしてしまった。そのせいか、話を聞こうとしたときには絶命してしまったのだ。次に襲われたのは、それから、3時間後だった。その時は、前回の事もあり（フイオに「ひびく叱られたので……」手加減して、襲撃者に大怪我させず、捉えることに成功した。しかし、話を聞こうとしたら自ら舌を噛み自決したのだ。その後も、襲撃が続きそのたびに襲撃者を捉えるがすぐに自決するので、コーラチ達は襲撃者を撃退するだけで捉えるのはやめたのだ。

「同じ事が続くとあきてくるな……」

コーラチはため息をついた。

「でも、どうして襲われるんだろう……」

「追剥か。何がじゃないのかー」

「だつたら自決することないじゃない。」

「それはそうだが……

「もう、こんなくだらない事考えるのやめようぜ。つまんないし。」

「くだらないって……。命を狙われてるのよ、私たちっ！」

「その事をちゃんと理解してるの、コーラチは。」

「理解してるって。でもさ、奴らに話を聞こうにも自決しちゃうんだから情報がまったく手に入らないだろ。情報が無いのに考えて、それは敵に対する恐怖心をあおる以外のなにものでもない。」

コーラチの言葉は正論だったのでフイオは納得せざるを得なかつた。

（やうかもしれないけど。少しは、気にかけてくれても。私は女子なんだから……。）

「…………」

「どうかしたか？」

「な、何でもないよつ。」

「そつか。」

（私、何考えてるの。これじゃ、まるでコーライチに気があるみたいじゃないつ！？）

フィオは頭を横に振り頭に浮かんだ考えを外に追い出した。その光景を横から見ていたコーライチは

（フィオも疲れてるんだろう）

と一人で納得し、黙つていていたことにした。

2人が襲撃者に襲われてから約2時間ほど歩き王都に到着した。

「つおおーー。門でかつ！」

コーライチは門の大きさに驚いていた。それもそのはず、その門の大きさは高さ300mもあり、同じ高さぐらい城壁が王都を囲んでいたのだから。

「コーライチ、恥ずかしいから大声出すのやめて。」

フィオもコーライチとようやくコーライチの顔を見て話せるようになつた。（まだ、恥ずかしさは残つているが）

「おは。じゃあ、はやく中に入りやがれー。」

コーライチが門をぐぐりつとすると

「お待ちください。」

門番がコーライチに話しかけた。

「ん？？」

「王都に入るには身分を証明するものが無ければ入る事が許されていません。身分を証明できるものを提示してください。」「身分を証明できるもの…。フィオどりすればいい?？」

フィオは少し怪訝な表情をしていたがコーライチに尋ねられるとこつもの表情に戻り

「ギルドカードでいいんじゃない。」「なるほど。」

コーライチはポケットに手を入れ、ギルドカードを取り出して門番にみせた。

「…………。確かに本物のようです。」

ギルドカードを返されポケットにしまった。同様にフィオもギルドカードを提示した。

「…………。こちらも本物のようです。ではお入りください。」

門番はフィオにギルドカードを返却し魔法を使って門の扉を開け

た。ゴーイチ達が門をくぐるとすぐに扉は閉まつた。

「…………。ここが王都か？」

ゴーイチが疑問に思つのもしょうがない。王都なのに入通りが少なく店もほとんどが閉まつているようだつた。

「王都つてこんなに人がいないのか？」

「そんなことありえないけど。普段は混雑しすぎて通りのどこに何があるのかわからぬいぐらいだもの。それに、おかしいと言えばさつきのやり取りもおかしいは。」

「そうか？ 僕は別におかしいと思わなかつたけど……」

「やり取り自体はおかしくなかつたわ。そもそも、1か月前に1人で来た時ときはあのやり取りが無かつたもの。急にするようになるなんて……、こんなに人がないと何か関係があるのかもしれないわ。」

「だったら、話を誰かに聞けばいいんじゃないか？」

ゴーイチはそう言つたが自分から聞きに行こうとしなかつた。しようがないので、フィオは通りの端を歩いていた女性に話しかけた。

「なんだい？？」

女性は怪訝な顔をしながらフィオの事を見た。

「どうして、昼間からこんなに人がいないの？」

「そんなのあんな噂が流れれば外を出歩こうとなんて誰も思わないよ。私だって食べ物が底を尽きかけなければ出歩こうなんて思わなかつただろうし。」

「噂？ 噂つてなんだ。俺たちここに来たばかりで知らないんだ。」

教えてくれないか。」

その言葉を聞くと女性はあからさまに嫌な顔をした。

「噂つていうのは、この王都にテロリストが現れて城を爆破するつて噂だよ。実際、この前、城にやつてきた貴族の乗り物が爆破されたんだよ。そのせいで、たくさんの市民が犠牲になつたんだ。もういいかい。はやく帰りたいんだけど。」

「うん。ありがとう。」

フィオの返事を聞く前に女性は早足で家へと帰宅した。

「だつてさ、コーラーイチ。」

コーラーイチの方を見るとコーラーイチが目を輝かせていた。

「テロリスト。これは戦いの予感。」

「言つとくけど私は嫌だからね。」

「ああ、フィオは捲き込まない。俺一人で戦つぜ。」

「え……、そもそも、テロリストが戦いを仕掛けるとは限らないよ。もしかしたら、爆弾だけ仕掛けで逃げるかもしれないし。」

その言葉を聞くとコーラーイチの顔は絶望に染まつた。

「とにかく、宿屋を探そ。王都まで来て野宿なんてシャレにならないんだから。」

コーラーイチの手を引つ張つてフィオは宿屋を探し始めた。

「本当にどこも開いてないのね。宿屋どころか雑貨屋も開いてないじゃない……」

「これじゃ野宿だな。食糧も森に行つて狩つてくるしかないか。」

「いやよ。王都まで来て野宿は。ひさしひにまともなお風呂に入れると思つてたんだから。」

「だったら、さつきの人にくけばよかつたものの……」

「うつ……」

フィオはユーライチの正論が胸に刺さつた。そして、聞こえなかつたふりをして通りの奥を見ると視界の端に開いている店を見つけた。フィオがいる場所からざつと300mぐらいの場所である。よく見ると、その店は今まさに扉を閉じようとしている。

「つー？ セつかく見つけたのに、逃してたまるかっ！？」

そう言つてユーライチを引っ張る様は乙女とは程遠いかった。

「待つてーー。閉めないでつーー！」

フィオの声が聞こえたのか店の主人は扉を閉めるのをやめた。

「ん。お密さんかい。悪いんだけどもう在庫は無いんだよ。すまないね。」

店の主人は本当に申し訳なさそうに謝つた。

「在庫？」

「食べ物の在庫だよ。食べ物を買いに来たのだろう？」

「あ、違うの。私たち宿屋を探してて、ここが宿屋かもって思った

の。ここに宿屋ない?」「

「う~む……。開いてないと思ひそ。テロがあつてから王都に来る人が少なくなったからの」

「そ、そんな~。」

フィオはその言葉を聞き、ショックのあまり地面にしゃがみこんでしまった。

「野宿決定だな。」

ゴーリチがとじめの言葉をフィオにたたき込んだ。しばらく、立ち直れそうになかった。その言葉を聞いた店の店主は中に入ったかと思つと一枚の紙を持ってきた。

「あんたら。この紙に書いてある場所に行きなされ。そこなら、閉まつていも泊まらせてくれると思ひそ。」

「本当!~?」

フィオは一瞬で復活した。

「ああ。だが、高い金額をとられるかもしれないが。」

「いいよ別に。泊まれるなりいくらでも出しちゃう。」

フィオは店の店主から紙を受け取り、店主にお礼を言つて書かれていた場所へと向かつた。

「ここみたいだね。」

店の店主に教えられた店は案の定閉まっていた。

「すみません。誰かいませんか？」

フィオが扉をノックしながら言つて、中からビタビタと音がして扉が思いつきり開いた。

「はーい。どなたですか？」

若い女性が出てきた。

「えっと。私たち旅人なんですけど。宿屋を探しててさつき出会つたおじいちゃんがここなら泊めてくれるって教えてくれたんですけど……」

「旅人さん。大歓迎だよ。わざわざ入つて入つて。」

コーライチ達の背中を押して店の中に入れた。

「ひそしひくりのお客さんだー。うれしーなー。」

女性は笑いながら踊つた。相当嬉しいようだ。

「あ、あの……」

「おつと、『じめん』じめん。自己紹介がまだだったね。私の名前はキュア。よろしくね。」

「私はフィオで連れがコーライチです。よろしく。」

「じゃあ、部屋に案内するけど。お代はこれだから。」

フィオはキュアが提示した金額を見て目を点にした。あまりにも高額だつたがここ以外で泊まれるところ知らないので我慢すること

にした。

「ふう～。疲れた～。」

フィオはベッドに倒れ込んだ。

「ん～。やわらかくてきもち～。今日は疲れたしこのまま休もつか

……

「そうだな。」

2人はそのまま眠りに入つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538y/>

異世界に刺激を求める者

2011年11月23日13時52分発行